

第1回 兵庫県立神出学園・兵庫県立山の学校の機能充実に向けたあり方検討委員会 議事録

1 日 時 令和7年9月5日（金）10:00～12:00

2 場 所 神戸市教育会館4階 404会議室

3 出席者

秋光恵子委員、新井肇委員、喜多和美委員、辻登志雄委員、中尾志都委員、西田勉委員、前阪一彰委員、三谷治委員、吉田利徳委員、水川男女青少年課長、奥本同副課長 他

4 内 容

(1) 開会 あいさつ

(2) 委員等紹介

(3) 委員長選出 委員の互選により、新井委員を委員長に選出

(4) 議事

ア 会議の運営について

委員会の会議は、個人情報に関する事項等を除き原則として公開することを決定

イ 施設の現状・課題について

(ア) 概要説明 配布資料に基づき事務局から説明

(イ) 意見交換 内容以下のとおり

(5) 閉会

【意見交換要旨】

(委員)

意見交換の前に、先ほどの事務局説明に、両施設から補足があればお願いしたい。

(委員)

神出学園は、昨年度末までに830名以上の修了生を輩出している。多方面から手厚い支援や助言を受けながら、不登校やひきこもりを経験した生徒たちが、自分を見つめ直し、生き方を見つける場となるよう運営を行っている。本学園を修了した多くの子どもたちが、高校・大学へ進学、または、アルバイト・就職といった社会参加をしており、豊かな自然環境と個別支援の成果と言える。現在は、但馬と淡路を除く県内の全地域から生徒を受け入れていることに加え、関連施設や不登校支援で困っている小・中学校、高校等へのアウトリーチ等も含めて支援・協働ができています。このことから、本学園は、兵庫県全域を対象に、不登校を始めとする多様な悩みや課題を抱える子供たちを誰一人取り残すことなく支援し、社会へと繋ぐ役割の一翼を担っている。

近年の情報インフラ等の社会変化、コロナ禍以降の働き方や家庭生活を含む価値観の変化により、不登校やひきこもりの状態や支援ニーズも変化しているように感じる。課題として

は、これまでの神出学園の支援を継続していくとともに、不登校やひきこもりの子供たちのニーズに対応する形で学びの場や居場所としての機能を高めるために、関連施設との連携を深め、また、施設の利用のしやすさについてもさらに充実していくことと考える。

(委員)

まず、資料に山の学校の月諸経費が4万円とあるが、実費に応じた徴収であるため、年度後半は3万円程度の徴収になっていることをお伝えしておく。

山の学校では、小・中学校、高校をはじめ様々な施設に出向き、草刈りや伐木などの地域交流活動を通じて感謝される経験を重ね、生徒に自信をつけさせ、自己肯定感・自己有用感を育んでいる。設置当初は、問題行動生徒、いわゆるやんちゃな生徒が多く、そういう生徒に対して、自然の偉大さに触れることにより、道徳心を養う教育を行ってきたと聞いている。

通信制高校については、令和6年度の4名の修了生がクラーク記念国際高校と単位連携しており、28単位取得し、進級している。

昨年度の修了生8名の保護者を対象に行ったアンケートでは、「とても良かった」が7名、「良かった」が1名と、全員が本校の取組に満足していただいた結果となった。

(委員)

意見交換の前に、確認事項・質問等あればお願いしたい。

(委員)

両施設における現状の課題認識は。

(委員)

広大な神出学園の敷地や充実した施設を、より有効に利用できるような取組が必要だと感じている。本学園には、センシティブな生徒もいるので、外部との交流をさほどしてこなかった。しかし、近隣の保育園との交流をしたところ、生徒たちは、年長者としてのふるまい・対応ができ、普段見せない表情・態度が見られた。外部との交流は有意義であり、取組拡充の必要性を感じている。

また、生徒の中にはもっと勉強したい、社会で生きていく力を身につけたいという気持ちがある子もあり、その思いが通信制高校への通学者の増加にも表れている。本学園は、学校ではなく、かつ、社会復帰への移行部分を支える施設という前提があり、これまではあえて学習指導には取り組んで来なかったが、個人のニーズに合わせて支援することの重要性を感じている。

(委員)

課題は、入学生の少なさ。

また、山の学校は、学校という名前がついているが、学校ではない。例えば、「山の学校ってどんなところ？」と聞かれたときに、「不登校の子が来るところ」とは言いにくい面があり、そこに広報の難しさがある。

(委員)

両施設とも、学校ではない教育機関であることが、存在意義であり強みであるが、一方で、弱点であるともいえる。PR の面や学びの面においてはネックになっている可能性が考えられる。

(委員)

入学者の減少や環境の変化を踏まえ、4点質問させていただきたい。①民間の通信制高校やフリースクールが増えてきているが、これらとの違い、強みは何か。②体験入学は40歳くらいまで受け入れているが、入学時年齢の引き上げは考えているのか。③在籍期間が神出学園は2年間、山の学校は1年間だが、なぜその期間設定なのか。④コスト面に関する今後の見通しはどうか。

(委員)

神出学園について、①強みとしては、まずは寮生活。不登校やひきこもりの子が寮生活できるのか、ということをつたえられが、入学生は、それぞれに「このままではいけない」「自分を変えたい」という思いを持って入学する。入学生によっては、寮での集団生活の中で、昼夜逆転の生活を改善したいと思う者もいる。また、動物の飼育については、都市型のフリースクールでは難しい。普段積極的な態度を見せない学園生が、熱心に動物の世話をするという姿もみかける。また、スタッフについては、公立高校での勤務等経験豊富な指導主事が在籍している。臨床心理士も3名常駐しており、いつでも相談できる環境となっている。

②入学時年齢の引き上げは、青少年を支援する施設の目的上、現状考えていない。③在籍期間は、修了後社会に出やすいよう、適切な期間として設定している。なお、修了後1年間はフォローアップする体制としている。④コスト面に関しては、現状、県からの補助金・委託料と月納金等により、収支を確保できている。

(委員)

山の学校では、①強みとしては、施設・設備が充実していること、公用車があり遠方に外出でき様々な活動ができること、県・県教委派遣によるスタッフが充実していること。②入学時年齢の引き上げは、壮年期等にも対象を拡充することも考えられるが、現状青少年施策として実施しており、他部局との調整が必要になる。③在籍期間については、現状、1年間で完結するプログラムであるため、在籍期間は1年が適当と考えている。④コスト面としては、人員増強と体育館の改修が課題と考えている。

(委員)

経費面でいうと、県からの補助金・指定管理料の他に、両施設の職員の本俸等は、派遣元である県で支給されているため、資料の金額以上にコストは生じている。指定管理を民間に委ねる場合のメリットの一つには、やはり経費の削減が上がるものと思うが、その削減対象の経費の主なところも、やはり人件費になると思う。

その削減は、優秀な資格職の確保が難しくなり、施設運営に支障を来す可能性があることに留意しなければならない。

また、施設の修繕に関しては、予算が限られていることから、現状はその場しのぎの対応になっている。本来、長期的な修繕については、県が計画し実施すべきものかと思う。

（委員）

県では、管財課が県立施設の修繕計画を一括して所管しているが、施設数が多いため、修繕の時期が到来してもすぐに実施されるとは限らない。委員会において、改修の提案があれば、個別に要望していく。指定管理については、県立施設の多くが公募化されているが、両施設は専門的な知識や技能が必要なため、現状では公募していない。この点については、委員会で議論頂きたいと考えており、ご意見を踏まえ検討していきたい。

（委員）

両施設とも、指定管理者の公募に向けたサウンディング調査を実施しているが、事業者から前向きな反応がないと聞いている。特に山の学校においては、地域的にも厳しいことに加え、青少年の教育や生活を担う重要性から、応札に参加する事業者はないのではないかと。民間事業者の参入を促すのであれば、施設の目的の見直しも必要になると思う。

また、数年単位で指定管理者が交替すると、ノウハウが蓄積されにくくなる課題もある。

（委員）

資料では、両施設の運営に年間合計 1 億 5000 万円投入しており、加えて、先ほどのご意見によると、更に人件費に多額を要しているとのこと。一方、生徒数は 2 施設あわせて 50 名程で、単純計算で 1 人あたり年間 400 万円を投じていることになる。また、ひきこもり、不登校の膨大な人数の中で、ここで支援できるのはごく一部でしかない。

ただ、入学者を増やしても収入は増加しない。いかに経費を効果的に活用できるか、ということが問題となるが、そうすると、結局は入学者を増やして魅力的な施設にしていくという方向かと思う。

（委員）

私が校長を務める専修学校も、両施設と似たような生徒が在籍している。設立時は、非行や暴力が社会的課題になっており、入学する生徒もやんちゃ系や高校中退者が中心であった。現在は両施設同様、不登校・ひきこもり等、精神的な生きづらさを抱えた子どもたちが多くなっている。

青少年を取り巻く課題は大きく変化しているが、両施設は、子どもたちの孤立を防ぎ、安心できる居場所となっている点で、非常に大きな意義がある。こうしたことから、近年の生徒数の減少は残念に思われるところである。

私の学校にも言えることだが、高校等外部に入学対象者の説明をする際、「普通の高校に行きにくい方」とか「普通の高校を途中でやめた方」など、非常に消極的な、消去法の考

え方しかなかった。現在では私たちは、「この学校だから行きたい」という積極的な選択肢となることを目指しており、両施設もそうならばよいということを思いながら、お話を伺っていた。

（委員）

通信制高校の中には、学校での活動や進路を含め、非常に前向きで積極的な広報に取り組んでいるというところもあり、親の目線からすると、普通の高校より良いのではと思える状況である。

その点、神出学園・山の学校は、県立施設であり安心でき、費用も安く、良い施設なのに、知らない人からすれば、ネガティブなイメージがある。ほとんどPRがされていない印象があり、プラスのイメージになるよう、積極的にPRに努めるべきである。

（委員）

多くの子どもたちにとっての進路の選択肢は、第一には、やはり全日制の普通科高校であり、高校を卒業しないと次のステージに繋がらないとの思いは強いと思われる。神出学園や山の学校は、通信制高校と連携しているため、高校卒業が可能であることを強くアピールすべき。

また、学校の先生も関わるできないような、ひきこもり状態が重い、通信制高校や定時制高校の通学も難しいような「完全不登校」のような子どもたちがおり、この先増えていくのではないかと思われる。こうした子どもたちは、神出学園や山の学校を選択する可能性があるため、こうした子どもたちに繋がるよう、スクールソーシャルワーカーや、ひきこもり支援の窓口となるような所へも、積極的に呼びかけていくことが重要。

（委員）

神出学園や山の学校に関わった職員に話を聞いたところ、山の学校に関しては、設立当初の、やんちゃな子どもたちの支援という役割は終えたという声もあった。神出学園、山の学校関係者方が県内の各所を訪問し広報されていることは承知しているが、入学者数が減少している状況からは、今後の実施方針等について検討する時期に来ていると思われる。具体的には、実施内容に加え施設名を変更するとか、女子や小・中学生など対象者を広げることなどが考えられる。

不登校の問題は、学校に行かないことそのものではなく、学びの機会がなくなること。神出学園や山の学校がそうした場になるよう、対象者を広げることも考えられる。

（委員）

教科の学習がないため学校ではない。しかし学びの場ではあり、大きな意義があると思っている。ただ、生徒数の減少は、もはやコストに言及せざるを得ない深刻な状況にある。それに対して胸を張って言えるものが必要だが、なかなか難しい。

学校のイメージを前提とした名称やスタッフの体制がありながら、教科の学習はなく高卒資格も取れない。正直なところ、こうしたことが却って、生徒数の確保などの対応を難

しくしている面があるように思われる。

（委員）

以前は、不登校の生徒や保護者に対し、全日制高校が難しければ通信制高校への転学を勧め、卒業できたことをもって、教員としても次のステップに繋げることができたと感じていた。現状、これだけ通信制高校が増えてくると、教員の立場としては、神出学園・山の学校は勧めづらい状況であることも理解できるが、生活面は神出学園・山の学校が支え、高卒資格は通信制高校で取得するという提案もできるため、学校現場でも積極的に紹介して欲しいと感じている。

（委員）

山の学校では、教育委員会から派遣された職員に対し、勉強を教えるのではなく、コミュニケーションをはじめとする非認知能力を育む指導を行うよう、最初に伝えている。

社会人でも転職が当たり前になっており、高校も定時制や通信制等、様々な形態があり、生徒は自分にあった環境を探すことになるが、本校は最後の受け皿と言えるのではないか。義務教育の年代でもないため、勉強を教えないといけないわけではなく、本校でも勉強を教えることはイメージにない。

（委員）

かつては、いい大学に行き、いい会社に入社することが幸せな人生であるという考えが主流だったが、近年は、社会や価値観が変化し、選択肢も広がっている。

以前、勤めていた定時制高校では、中学校で不登校だった生徒が多かったが、夕方から登校できることで、自分に合った生活ができていた。

勝ち負けといった価値観ではなく、個人に合った生き方を尊重する社会になりつつあり、自分のやりたいことをしながら卒業できる通信制高校が人気を集めている。こういった状況からは、神出学園・山の学校も選択肢の一つになり得ると感じている。

施設へ通う期間は、はた目には休憩時間と見られることもあるが、生徒にとって貴重な時間である。長い人生の中で、そうした選択があっても良いのではないかな。

被災地でのボランティアや馬の世話など、そんなに大したものではないと言う人もいるかもしれないが、得がたい経験はその後の人生で生きてくる。体験や経験が大事との価値観が高まっている状況からは、施設の存在意義は十分にある。

（委員）

価値観の変化はあるが、親の望むことは、子どもが自分の力で生きること。かつては、良い大学・企業に入れば安泰の社会だったが、何が起こるか分からない社会では、勉強だけの人間では不十分。様々な体験を通じて自分を見つめ直したり気づきを得たりということであれば、両施設の取組はむしろ社会に見合ったものなのではないかとも思う。

両施設の環境を求めている親や若者が多くいるとすれば、多方面へのPRが必要なのではないかな。

(委員)

神出学園・山の学校とも、県内の高校を中心に広報活動されているが、当の高校が、在籍している高校生に対し施設への転学を勧めるケースは、ほとんどないように思う。高校への広報よりも、知名度を高めるという意味でも、小学校や中学校を対象として広報した方がよいのではないかな。

(委員)

高校に勤めていた際に、転学する子は何人もみてきた。両施設を勧めたこともあるが、高卒資格が取れないという点において、選択肢には入らなかった。一度、高校に入学した子やその保護者は、なんとか高卒資格を得たいとの思いが強い。小学校や中学校段階でのアピールは必要かもしれない。

(委員)

以前、スクールカウンセラーとして高校に勤めていた際、不登校支援にあたり、高校卒業が念頭にあると、神出学園や山の学校は勧めにくいとの実感があつた。

不登校の期間中に神出学園へ一日体験に行った何人かの中学生から、そこでの体験活動が楽しく、入学したいという声があつたと聞いた。

現状、高校に行き、大学に進学し、いい会社に入社することがすべてではないということとは理解されつつあるが、かといってその他の選択肢を知らない子も多い。神出学園・山の学校では、通信制高校とも連携しているし、様々な経験もできるし、こうした取組にマッチするお子さんは一定数いると思われる。

(委員)

神出学園の入学者の選考にも参加させてもらった。入学希望者の中には、自傷やオーバードーズなど、相当に追い詰められているような者もあり、学園で対応出来るものなのかななど思うこともあつたが、現場のスタッフは、そのような視点では捉えておらず、「どのような支援ならば効果があるのか」「学園の環境に合うのではないかな」など、一人ひとりの置かれている状況を考えて、自分たちの業務に取り組んでいるような状況である。

資料では、不登校・ひきこもりの人が増えているにもかかわらず、神出学園・山の学校の入学生は減少しており、ニーズに対応出来ていないように思われることもあるかもしれないが、これら調査は、多分にコロナ禍の影響が大きく、特段の配慮までは要しない者や両校の支援までは必要としていないような者も含まれているのではないかと感じている。

生徒数が減っているからといって両校の役割は終わっているというのは早計ではないかなと思う。

(委員)

不登校に含まれない長期欠席の生徒数も相当数おり、支援を要する子どもたちが多数いることに留意する必要がある。

(委員)

コロナ禍の時は、生徒は登校せず自宅待機の状況であったが、欠席とはならないため不登校にもあたらない。

(委員)

不登校の子は、両施設に入るような、スタッフの見守りや寮生活を通じた社会生活の基盤作りの必要があるような子がいる一方、通信制高校に通うような子は前向きに生きていく力を持っており、二極化しているような印象がある。

生徒数が増えていかない状況からは、現状の支援に加えて、学びたい意欲がある子には高卒資格が取得できるようなサポートのコースを作るなど、選択肢を増やすような支援が考えられる。

(委員)

最後に、意見交換の内容をまとめさせて頂く。

課題としては、やはり生徒が集まっていないこと。

また、神出学園・山の学校の生徒が同質化しているということ。

そのため、神出学園・山の学校それぞれの存在意義が成り立つのかということが、少し難しくなっている。

そこで、改めてターゲットが誰なのかを確認する必要があると思われる。コロナ禍の影響もあり、高校も含めて不登校児童生徒数が急増、高校中退も増加している中で、自分を変えたい、変わりたいと願う子も多くなっていると思われる。そうした子どもたちへのアプローチとして、学びの場を提供するだけではなく、生活を支えるために寮を併設し、多様な体験活動を行い、最終的には社会的自立に繋がることをめざした支援のあり方が、両施設の機能・存在意義としてアピールできないか。

また、児童養護施設や児童自立支援施設といった、福祉系の類似施設との棲み分けをどう整理していくかも課題である。両施設の設置時は、こうした児童福祉施設のイメージがあったと思われるので、今後、交流を図ることなども検討してよいかもしれない。

こうした、寮生活や体験活動といった他に見られない特徴を、マイナスではなく、いかにプラスの選択肢として打ち出せるかが、大きな課題である。

とすると、いわゆる教科学習の場ではなく、そこで生活しながら生きることを学び、施設を出てそれぞれのステージへ進んでいく、いわば次のステップへの移行のための施設と位置づけられるのかなとも思う。

そういうことも踏まえ、今後も委員の皆さんで意見を出しあいながら、また、コストへの対応が避けられないことも意識しつつ、2回目以降も議論を進めていきたい。

(終了)